通時的に見るワードペアの語順の交替

青　木　繁　博

Reverse Word Orders of Binomials: A Diachronic Approach

Shigehiro Aoki

１．はじめに

ここで言うワードペアとは、pick and choose、lock and keyなど、２語が等位接続詞などで結ばれた英語表現で、英語の歴史を通じて幅広く使われているものである。これらの多くは、そこに含まれる２語は順番（語順）が定まっていると言われている。しかし一部の表現については、異なる語順で、なおかつ同じ意味で使われることがある。ワードペアの語順が定まってるかどうかについては、既にいくつかの先行研究でも扱われているが、そこには通時的な観点、すなわち各々の表現がいつどのように語順を交替させたり固定させたりしたかを実際に検証する視点が少なかったように思われる。本論文は、そのような視点をワードペアの考察に導入することで、ワードペアの語順に関する新たな面を提示しようとする試みである[1]。

２．ワードペアの語順について

２．１．ワードペアの語順の固定性の問題

Spears (2000) の*NTC's American Idioms Dictionary*の巻末には、"Irreversible Binomials and Trinomials"（語順が定まった２語からなる表現と３語からなる表現）を約500例集めたリストがある（Appendix, pp. 621-25）。その説明箇所では、よく知られた言い回しの一つであるfast and furiousを例に、当該の表現は以下のように定義付けられている。

> Irreversible binomials and trinomials are sequences of two or three words that are in a fixed order, such as *fast and furious*, but not *furious and fast*.（p.621）

もちろんこのことは大多数の語順の定まったペアに当てはまるものではある。しかしながら、少数ではあるが、上述のリストにも含まれるような「逆の語順では使われない」とされているペアが、実際には逆の語順でも使われているケースが見られることがある。そのような問題、すなわち、ある種の「ぶれ」が語順に見られる点については、どのように説明されるであろうか。

上のような問題は決して新たに指摘されたことではなく、先行研究においても扱いがある。Mollin（2012および2014）は大規模なコーパス（BNC）を使った調査を通じて、語順が定まっているとされる慣用的なペアの多くが、語句にもよるが、かなりの割合で逆の語順でも用いられていることを数量的に明らかにしている。“irreversible”という用語は場合によっては誤解を招くもので、これらの表現には、語順が定まっている傾向が見られる、といった捉え方が妥当なのではないかと感じられる。

２．２．ワードペアの語順が入れ替わることの特異性について

複数語からなり、１語ずつの意味の総和では全体の意味が決まらないワードペアは、その点では慣用的なフレーズ表現（イディオム、熟語、最近の用語で言えばmultiword unit）の一種であるとも捉えられる。そう考えた場合、あるワードペア［A and B］が、逆の語順［B and A］でも使われ、同じ意味を表すとすれば、これは他のフレーズ表現にはない特徴であると言えるのではないか。イディオムや成句、ことわざなど、複数語からなる表現のほとんどは、構成要素である語の順番を入れ替えたときには、別の意味になるか、意味不明となるか、いずれにせよ成り立たないであろう。これに対してワードペアでは、「等位接続詞の前後の語の入れ替え」というごく限られた条件ではあるが、明らかに多くのケースで、語順の交替が許容されている。このような、熟語全般からすれば異質にも思われる語順の交替可能性は、現時点では仮説ではあるが、ワードペア使用に関わる歴史が影響していると考えられ、したがって、それは通時的に見た場合にのみ明らかになると考えられる。

２．３．通時的に見るワードペアの語順

現代英語を離れて古英語・中英語の例を扱うとき、ワードペアの語順には現代英語とは違った側面が見られることがある。例えば中英語のテキスト（概ね14世紀）では、一つのテキスト（一人の著者）でも異なる語順のワードペアが使われていたり、あるいは、現代英語とは逆の語順の方がむしろ頻繁に使われているケースなどが散見される。この点では、一般に中英語ではワードペアの語順の自由度がより高い印象である。過去においてそのような事実があったからこそ、現在でも一部のペアは異なる２つの語順で用いられたり、またそういった使用の歴史を背景として、新たに作られたペアについても語順の交替がある程度許されているのではないだろうか。

しかしここで疑問が生じる。ワードペアの語順が、より自由だった時代から、現在のように１つの形へと収束していくような流れがあるとするならば、その変化はいつ、どのように起こったのだろうか。そのとき、もちろん個別のペアの語順も問題ではあるが、もし仮に複数のペアが連れ立って変化し、総じて語順が定まった時期などがあるのだとすれば、そこには何らかの、ワードペアに限らず言語変化の全般にも関わる「変わり目」といったものがあるのかもしれない。そういった点を将来的には明らかにすることを目指しつつ、以下、本論文では具体的ないくつかのワードペアについて語順の変遷に関する調査を進めていこうと考える。

３．調査と分析・考察

３．１．調査の対象や考察を進める手順など

本論文では以下、ワードペアの語順のうち、通時的に見て始めに使われていた語順を「語順１」、その後使われるようになった語順を「語順２」とする。

本論文の調査においては、Oxford English Dictionary（Online版）を用い、逆の語順でも使われて

いるペア（語順１と語順２が共存している）、または過去においては逆の語順も見られたペア（語順１から語順２へと移った、など）の、いずれかの特徴が見られる表現を、見出し・小見出しから集める[2]。それらの語句のエントリーに採録されている用例を確認し、語順１・２それぞれの用例の数を数え、さらに「初出年」や「最終年」などを表にまとめる。これを通じて、ワードペアの語順が今のように定まった（あるいは定まっていない）経緯、すなわちワードペアの語順の変遷を、ある程度具体的に、数値などを伴って記述したいと考える。

その上で、以下のような疑問点（研究課題）について改めて考えたい。

１）個々のワードペアの語順は、具体的にどのように変遷したか（語順の交替、異なる語順の共存、一方の語順への固定化などの進み方はどうだったか）。

２）複数のワードペアの間で、語順の変遷の面で共通する傾向などはあるか。

３）語順の変遷に何らかの傾向が見られた場合、その理由や背景には何が考えられるか。

３．２．調査結果

ここに調査の結果を示すが、表についての注意点は以下の通りである。

語順１：始めに使われていた語順　　語順２：その後使われるようになった語順
初出年：用例が見られる最初の年　　最終年：用例が見られる最も新しい年

・ここでは便宜上、語順１のアルファベット順にペアを並べた。
・OED Onlineでの語句の説明や用例数などの点から、主たる語順であると考えられる方に網掛けして示した。ただしペアによってはどちらが主たる語順か判別できないものもある。
・廃用に関する記述があるもの（*Obs.*［Obsolete］または†）については表中の注に記した。

表：OED Onlineに見られる、ワードペアの異なる語順とその使用時期

上：語順１ 下：語順２	初出年	最終年	用例数	注
ale and toste	1592	—	1	
toast and ale	1693	—	1	
ball and claw	1875	1990	4	
claw-and-ball	1902	1955	3	
bidders and beggars	1362	—	1	廃用
beggars and bidders	1393	—	1	廃用
bloodless and boneless	*c*1225	*c*1225	2	廃用
boneless and bloodless	2006	—	1	廃用だが最近の用例あり
choose and pick	*c*1450	1601	3	廃用
pick and choose	1576	2003	10	
clench and rove	1419–22	—	1	
rove and clench	1488	1993	10	

上：語順１ 下：語順２	初出年	最終年	用例数	注
couchant and levant	1496–7	—	1	
levant and couchant	1594	1872	4	
dot-and-dash	1850	2013	10	
dash-and-dot	1882	—	1	
drum and trumpet	1777	2006	5	
trumpet and drum	1988	—	1	
dumb and deaf	?*c*1225	1613	2	
deaf and dumb	*c*1540	1884	7	
far and wide	eOE	2011	14	
wide and far	*a*1325	1944	8	
feed and foster	*a*1050	*c*1300	3	廃用
foster and feed	*a*1400–50	1647	2	
fife and drum	1672	1958	4	
drum-and-fife	1877	1899	2	廃用
flocks and herds	1587	1873	2	
herds and flocks	1596	—	1	
flow and ebb	*c*1200	—	1	
ebb and flow	1340	1871	10	
free and frank	1481	1599	3	
frank and free	*c*1515	1633	7	
free and quit	*c*1460	1876	2	
quit and free	*c*1475	1509	2	
full and frequent	1606	1726	2	廃用
frequent and full	1673	1746	2	廃用
game and glee	OE	1894	12	
glee and game	1725	1903	3	
go and come	eOE	2007	25	
come and go	*c*1384	2013	32	
goers and comers	*a*1425	1988	3	
comers and goers	*a*1450	2004	9	
great and small	*a*1325	1886	6	
small and great	1535	1999	4	
groove and tongue	1823	—	1	
tongue and groove	1882	1977	5	
knur and spell	1852	1972	4	
spell and knur	1855	—	1	

上：語順１ 下：語順２	初出年	最終年	用例数	注
lock and key	OE	2012	16	
key and lock	*c*1275	1994	2	
lop and top	1669	1972	5	
top and lop	1805	—	1	
loud and still	*a*1250	1636	4	廃用
still and loud	*c*1320	1430–40	2	廃用
means and ways	1431	2000	6	
ways and means	1433	2007	52	
mine and thine	1555	1891	2	
thine and mine	1927	—	1	
ob and sol	1588	1621	2	
sol and ob	*c*1660	—	1	
off and on	1535	2001	39	
on and off	1668	2001	28	
one and all	*a*1400	1992	10	
all and one	?*a*1513	1578	2	廃用
pale and green	1525	*c*1650	2	
green and pale	*a*1616	1794	2	
pro and con	*c*1450	1872	27	
con and pro	1667	—	1	
pro and contra	*c*1450	2001	17	
contra and pro	?*a*1500	1575	2	
rice and peas	1898	2006	7	
peas and rice	1930	1973	3	
rump and stump	1824	2002	5	
stump and rump	1825	1901	3	
strain and stress	1842	1962	7	
stress and strain	1854	1979	7	
stud and mud	1788	2012	3	
mud and stud	1839	1994	2	
stuff and nonsense	1749	1894	3	
nonsense and stuff	1770	—	1	廃用
tail and top	1558	—	1	廃用
top and tail	1849	2012	3	
tenon and mortise	1610	1856	5	
mortise and tenon	1631	1990	9	

上：語順１ 下：語順２	初出年	最終年	用例数	注
then and there	1442	1889	5	
there and then	1496	1908	4	
thick and thin	*c*1386	1900	18	
thin and thick	1426	—	1	
tide and time	*a*1225	1604	4	廃用
time and tide	1474	2000	7	
Tom and Tib	1567	1606	2	廃用
Tib and Tom	1689	—	1	廃用
Urim and Thummim	1537	*a*1886	17	
Thummim and Urim	1539	1560	2	
us and them	1857	2003	4	
them and us	1948	1998	5	
ward and watch	1390	1546	2	
watch and ward	1398	1906	25	
wattle and daub	1808	1901	9	
daub and wattle	1883	—	1	
wear and tear	1666	1902	16	
tear and wear	1705	1901	4	
well and good	1548	2008	11	
good and well	1622	2004	4	

３．３．分析・考察

前節の表を見渡して分かったこととしては以下の３点が挙げられる。

１）ワードペアの語順の変遷には、「語順１→語順２」だけでなく、「語順１→語順２→語順１」「語順１→語順１・２の共存」「語順１・２の共存→いずれかの語順」などのパターンが見られる。
２）現代英語の観点からは「語順が定まっている」とされるペアでも、過去の一時期、またはペアによってはかなりの期間、異なる語順と共存していたものが含まれている。
３）多くのペアでは、単語が「長－短」から「短－長」の順に並ぶよう語順が変わっていったと見受けられるが、時期によってはそれとは異なる傾向も見られることがある。

１点目、まず変遷の仕方については、上にまとめたようにいくつかのパターンがあることがわかった。もちろん中には、「choose and pickからpick and chooseへ」などのように、語順１から語順２へと単純に移行したと思われるものもある。しかし例えば、当初は語順１が使われていたところに、後から語順２が追加され、その後再び語順１に戻る、といった変化など、複合的な変遷が見られるペアも多かった。

２点目については、先に述べた、中英語期など現代英語より前の時代ではワードペアの語順の自由度が高いと見られる点を裏付けるものであろう。現代英語の観点からは意外なものも含めて、多くのペア

で、過去のある時点では異なる語順の用例が使われていたことなどが明らかになった。その時期はペアによって様々だが、総体的に見て、中英語期から近代英語期にかけては異なる語順の共存が見られ、その後現代英語では共存は解消され固定化されているといったペアが多かったように思われる。

３点目、語順の定まり方については、Cooper and Ross（1975）が現代英語のペアに見られる主要な傾向の一つとして挙げた、２語の単語が［短-長］の順に並ぶという傾向に、多くのペアは合致していると見受けられる。この場合、語順が定まっていく過程のどこかで、上述の傾向がある種の規範として働くことで、語順が定まっていったと分析されるであろう。しかしながら、上で述べたように、ワードペアの語順の変遷にはいくつかの異なる局面が認められる。特に、長い間使われてきたようなペアについては、その期間に一様に［短-長］への指向が働いたわけではなく、時には他の傾向との間でせめぎ合いなどがあったのではないかと考えられる。例えば、ペアが生み出された当初から［短-長］の語順だったペアが「語順１→語順２→語順１」のように変化したケースでは、始めと終わりには［短-長］の傾向が強く働いたが、中間ではその傾向は弱まった、または別の要因がより強く働いた、など説明できるであろう。そこにあったのは表現上または文体上の工夫であるかもしれないし、ヴァリエーションの一種として位置付けられるかもしれない。過去においては、現代英語よりも、ワードペアが慣用としてではなく、表現技法として重視されていた可能性もある。もっとも、このような点についてはまだ詳細に研究がなされていない部分もあるので、今後はさらにワードペアの変遷の局面ごとの背景を探る試みを続けていきたいと考える。

４．む す び

今回扱ったペアはワードペアの数（種類）としては必ずしも多くなかったが、その分、それぞれが実際に使用された例に関しては、OED Onlineに基づいて、具体的に用例数や初出年などを示すことができた。そのことが、ワードペアの語順の交替という漠然としたものになりがちなテーマについて、ある程度イメージできる形で記述することに結び付いたと考えられる。これを可能な限り多くのペアに広げることが今後の課題である。現代英語という一つの層を見ることも大切だが、それにとどまらず、ワードペアの使用の経緯を辿ることで、ワードペアの語順の問題は、何らかの結論へとつながっていくのではないだろうか。

注

[1] 本論文で示すデータは、概ね2019年12月18日から2020年１月30日までにOED Onlineにアクセスした結果に基づいている。OED Onlineは随時更新されるため、アクセスする時期によっては異なる結果が提示されることがあり得る。なお具体的にワードペアに言及するときや表を作成する際に、異綴が見られるペアは代表的な綴字に統一したり、原文にある書体（イタリックやボールドなど）を省略したりしている場合がある。

[2] 複数のエントリーに同一のペアが２回以上見られる際には、同じ用例が重複して採録されている場合はできるだけ取り除いた上で、用例数の集計としてはまとめて提示する。なお本論文では、接続詞andによって結び付いた２語からなるワードペアのみを扱い、orなど別の接続詞によるものや、３語以上からなるものは扱わない。

コーパス

OED Online. http://www.oed.com/

参考・参照文献

青木繁博（2007）「中世英語散文の文体とペアワード－Julian of NorwichとMargery Kempe」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第37号、59-72.

—.（2015）「特定の文学ジャンルにおける中英語ワードペアのヴァリエーション」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第45号、45-55.

—.（2019）「OED Onlineに見られるワードペアについて」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第49号、11-17.

Cooper, William E., and John Robert Ross（1975）"World Order." *Papers from the Parasession on Functionalism*. Eds. Robin E. Grossman, L. James San, Timothy J. Vance. Chicago Linguistic Society, 63-111.

Gustafsson, Marita（1975）*Binomial Expressions in Present-Day English: A Syntactic and Semantic Study*. Turku: Turun Yliopisto.

—.（1984）"The Syntactic Features of Binomial Expressions in Legal English." *Text* 4, 123-141.

Katami, Akio（2009）"Word Pairs in Middle English Mystic Prose of the Fourteenth Century."『埼玉学園大学紀要』経営学部篇 9, 177-189.

Kikuchi, Kiyoaki（1995）"Aspects of Repetitive Word Pairs." *POETICA*（Tokyo: Shubun International Co., Ltd.）42, 1-17.

Koskenniemi, Inna（1968）*Repetitive Word Pairs in Old and Early Middle English Prose*. Turku: Turun Yliopisto.

—.（1975）"On the use of repetitive word pairs and related Patterns in *The Book of Margery Kempe." Style and Text: Studies Presented to Nils Erik Enkvist*. Ed. Hakan Ringbom. Stockholm: Sprakforlaget Skriptor AB, 212-218.

—.（1983）"Semantic Assimilation in Middle English Binomials." *Studies in Classical and Modern Philology: Presented to Y. M. Biese on the Occasion of his Eightieth Birthday, 4.1.1983*. Eds. Iiro Kajanto, et al. Helsinki: Suomalainen Tiedeakatemia, 77-84.

Leisi, Ernst（1947）*Die tautologischen Wortpaare in Caxton's "Eneydos"*. New York: Hafner.

Malkiel, Yakov（1959）"Studies in Irreversible Binomials." *Lingua* 8, 113-160.

Miwa, Nobuharu and Su Dan Li（2003）"On the Repetitive Word-Pairs in English－With Special Reference to W. Caxton－."『鹿児島大学法文学部紀要 人文科学論集』58, 49-66.

Mollin, Sandra.（2012）"Revisiting Binomial Order in English: Ordering Constraints and Reversibility." *English Language and Linguistics* 16. 01, 81-103.

—.（2014）*The (Ir) reversibility of English Binomials: Corpus, Constraints, Developments*. Studies in Corpus Linguistics 64. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Shibata, Shozo（1958）"Notes on the Vocabulary of The *Book of Margery Kempe." Studies in English Grammar and Linguistics: A Miscellany in Honour of Takanobu Otsuka*. Eds. Kazuo Araki, et al. Tokyo: Kenkyusha, 209-220.

Shimogasa, Tokuji（1997）"Binomial Expressions in *Le Morte Arthur." Bulletin of the Faculty of International Studies, Yamaguchi Prefectural University* 3, 59-74.

Spears, Richard A.（2000）*NTC's American Idioms Dictionary: The Most Practical Reference for the Everyday Expressions of Contemporary American-English*. 3rd ed. McGraw-Hill Companies.

Stone, Robert Karl（1970）*Middle English Prose Style: Margery Kempe and Julian of Norwich*. The Hague: Mouton.

須部宗生（1999）「語順固定の英語対句表現の一考察」『静岡産業大学国際情報学部研究紀要』1、39-68.

谷明信（2003）「初期中英語the 'Wooing Group' のWord Pairsの用法とその特徴」『兵庫教育大学研究紀要』第23巻 第２分冊、19-24.

—.（2008）「Chaucer の散文作品におけるワードペア使用」『ことばの響き—英語フィロロジーと言語学—』今井光規・西村秀夫（編）. 東京: 開文社、89-116.
渡辺秀樹（1994）「同意語並列構文の系譜」『英語青年』140.6（1994年９月号）、285-287.